

第8章 事後調査の結果により必要となった環境の保全のための措置

8.1 騒音

第7章に示した騒音に係る「事後調査の結果と環境影響評価の結果との比較検討の結果」により、N-4.1での工事の実施に伴う環境影響は、環境影響評価図書に記載された環境保全措置を講じたことによって、低減されているものとする。

したがって、騒音については、新たな環境保全のための措置を講じる必要はないとする。

なお、環境影響評価図書に記載した環境保全措置は、以下に示すとおりである。

ア	ヘリコプター着陸帯の規模を直径75mから直径45mへと縮小したことにより、建設機械の稼働台数を減らすことができ、建設機械の稼働に伴い発生する建設作業騒音による影響を低減します。
イ	稼働する建設機械が一時期に集中しないように工事工程を調整します。
ウ	早朝や夜間、日曜及び祝日の工事は原則として実施しません。
エ	建設資材の搬入などに伴う道路交通騒音対策としては、集落をできる限り避ける等、周辺環境に配慮した運搬経路を設定します。また、工事用車両が一時期に集中しないように工事工程を調整し、工事用車両の整備・点検を行うとともに運転者に対して適正な走行に努めるよう教育・指導を行います。
オ	建設機械は低騒音型を使用するほか、整備・点検を徹底し、整備不良に起因する騒音の防止に努めます。
カ	工事用車両の運行経路には規制速度の遵守等を促す表示板を配置し、工事用車両の走行による道路交通騒音の増加を抑制します。
キ	アイドリングストップや建設機械に過剰な負荷をかけないようにし、丁寧に運転するなど、工事関係者に対して必要な教育・指導を行います。

8.2 赤土等による水の濁り

第7章に示した赤土等の水の濁りに係る「事後調査の結果と環境影響評価の結果との比較検討の結果」により、N-4.1での工事の実施に伴う環境影響は、環境影響評価図書に記載された環境保全措置を講じたことによって、低減されているものとする。

なお、N-4地区における無障害物帯のうち造成工事を行った箇所とは異なる箇所において発生した斜面の崩落について、本年1月12日に確認し、同日のうちに、更なる土砂の崩落及び崩落した土砂の滑落を防ぐため、こうした箇所を応急的にシートで覆う措置を施した上で、同年2月23日までに、土砂の崩落を防止するための板柵を設置するとともに崩落箇所を復旧し、復旧した斜面及び崩落した土砂の表面には、崩落の防止等のため、植物の生育を阻害しないシートの敷設や在来種の播種を行ったところである。

また、崩れた箇所近隣の小川にて、濁度を継続的に測定しているが、表土の崩れ後と工事着手前の値を比較しても、崩れ後の降雨時においても、濁りの状況に変化は見られないことを確認している。

次年度以降は、存在・供用時の調査において実施する水質調査において、赤土等の流出が生じていないか確認する。

なお、環境影響評価図書に記載した環境保全措置は、以下に示すとおりである。

本工事中は第2章の中で示した「赤土等流出防止対策」に基づいて、降雨時の対策は、発生源対策として法面等へのシート被覆や種子吹付等、流出防止対策としては切回し水路、土砂流出防止柵等の設置を行い、最終処理対策として施工区域から発生する濁水を沈殿池に一時的に貯留し、濁水処理プラント（凝集沈殿方式）により処理した後、SS濃度25mg/L程度で放流し、周辺環境に影響を及ぼさないよう配慮します。なお、土砂流出防止柵の構造は図7.1.1(1)に示すとおりで、中詰め土砂を施して設置します。

台風等の非常時には工事は中止しますが、環境保全対策としては台風接近前に施工中の造成面をシートで被覆する等の発生源対策を行い、降雨による裸地面からの赤土等の流出を防止します。さらに、各工区の作業終了時には、裸地面の赤土対策については、濁水処理プラントの自動作動による対応を行います。計画降雨量以上の降雨が予想される場合においては、裸地面のシートの被覆等を行います。なお、夜間の降雨時においては、作業員による濁水処理プラントの点検を実施します。

また、ヘリコプター着陸帯の規模を直径75mから直径45mに縮小することによるヘリコプター着陸帯の切土及び盛土面積の縮小、進入路等の線形の改良、進入路の幅員を3.6mから約3mへの縮小を実施することにより、工期が短縮され、土工量についても小さくなることから、造成に伴い発生する濁水の発生量は低減します。また、改変面積の縮小に伴う工期短縮により、濁水処理対策の管理を徹底・強化できるものと考えられます。

なお、当該地区に存在する主要な発生源においては、事業者として実行可能な範囲で工事着工前に種子吹き付け等の対策を講じることとします。発生源対策（場所、規模等）は、事業実施区域からの濁水の影響の程度を勘案するとともに、周辺の発生源箇所の地形・地質状況等を踏まえ、在来種を用いる等自然環境へ配慮して行います。

8.3 植物

第7章に示した植物に係る「事後調査の結果と環境影響評価の結果との比較検討の結果」により、N-4.1での工事の実施に伴う環境影響は、環境影響評価図書に記載された環境保全措置を講じたことによって、概ね低減されているものと考えられる。

ただし、移植した植物については、N-4地区での2カ所の移植地のうちN4①の生存率が低いことから、移植した株の生育状況について、引き続きモニタリングを行うとともに、その状況に応じ学識経験者に相談しながら対策を講じることとする。

なお、環境影響評価図書に記載した環境保全措置は、以下に示すとおりである。

ア 土地の改変による影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 植生や貴重な植物種への影響を低減するため、ヘリコプター着陸帯の規模を直径 75m から 45m へ縮小します。また、進入路等の線形の改良を行い、進入路の幅員を 3.6m から約 3m へ縮小します。さらには、より環境への影響を低減するため、ヘリコプター着陸帯及び進入路等の配置における検討を行いました。
- b 事業実施区域内で確認された貴重な植物種については、健全な生育を確保し、地域個体群の存続を図るための措置として、伐採及び造成工事前に移植を実施します。移植方法の検討及び移植先の具体案を、表 7.2.1(1) 及び図 7.2.1(7)～図 7.2.1(9) に示しました。ラン科植物を含めた移植対象種(計 16 種)については、非改変部・改変部における各種の分布状況や、ヤンバル固有種等の希少性を考慮し、選定しました。事前(移植前)に、各種の詳細な生育地点を確認した上で、移植を実施します。移植先は、乾燥化等の影響範囲(50m)を考慮し、選定します。各種の生育地と類似した環境で、本来の生育地(移植前)から距離が近く、可能な限り、環境攪乱の程度が小さい適切な場所とします。移植方法は、一般的に周知されている移植事例を参考とし、事例のない種については、生育環境、生活史等を考慮し、現時点で可能と考えられる方法を採択します。移植後の個体については、定期・継続的に事後調査を行い、活着及び生育状況を把握した上で、各種における生育環境の改善等、適切な対応を施します。
- c 造成工事に伴う伐採時には、テープ等の張り付けにより、施工区域と残存植生を明確にし、無用な伐採に伴う植生の消失を防止します。
- d 残存植生への損傷を防ぐため、機材運搬経路及び沈殿池等の設置(図 7.2.1(4) 参照)には十分配慮し、進入路においては建設機械に小型の機種(幅員を超えない程度)を使用します(図 7.2.1(3) 参照)。また、造成工事においては、ヘリコプター着陸帯で法面等の施工区域以外での建設機械の稼働はないことから、工事による副次的な影響はないもの考えられますが、万一、植生の損傷等が発生した場合においては復元を行います。
- e 施工区域を明確にし、残存植生における作業員等の無用な立ち入りを制限します。
- f 施工区域と残存植生の境界には、土砂流出防止柵等を設置し、周辺植生への土砂流出を防止します。
- g ヘリコプター着陸帯、無障害物帯及び進入路の法面において、早期緑化を行います(図 7.2.1(5)、図 7.2.1(6))。ヘリコプター着陸帯は全面芝張とし、無障害物帯や進入路の法面において、草本類の植栽及びマント群落・ソデ群落の形成を図ります。
無障害物帯等における植栽種には、改変部を含め、現地に生育する植物(幼樹、稚樹、種子、伐り株、埋土種子等)を利用します。また、植栽時には、専門家等の指導・助言を参考とし、マント群落・ソデ群落が形成されるまでの間は、周辺林内への影響をより低減するため、工事期間中に防風ネットを設置します。

h 伐採した樹木は、環境保全対策整備(人工営巣木、採餌木等)、建設用材(土砂流出防止柵、その他杭出し等)として有効利用を図り、残余分については伐採した枝部等を木材破砕機でチップ化し、法面の流亡や乾燥化対策のマルチング材等として活用するなど、可能な限り、北部訓練場内で処分されるように努めます。

イ 建設機械の稼働に伴い発生する大気汚染物質の影響

(7) 環境保全措置の内容

- a ヘリコプター着陸帯の規模を直径 75m から 45m に、また、進入路等の線形の改良や、進入路の幅員を 3.6m から約 3m にすることにより、事業規模を縮小し、建設機械の稼働に伴う大気汚染物質の排出量を低減します。
- b 粉じん等の発生源対策として、早期緑化(ヘリコプター着陸帯における全面芝張、無障害物帯における草本類の植栽等)を行います。
- c 大気汚染物質の排出量をさらに低減するため、可能な限り排出ガス対策型建設機械を使用します。
- d 整備不良による大気汚染物質の排出量を防止するため、建設機械の整備点検を徹底し、空ぶかしや不必要な高速運転を避け、待機時には細かなエンジン停止を実施します。
- e 裸地面への散水、工事用車両のタイヤ洗浄、強風時の作業を控え、粉じん等の発生を低減します。

ウ 造成に伴い発生する濁水の影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 植生や貴重な植物種への影響を低減するため、ヘリコプター着陸帯の規模を直径 75m から 45m に、また、進入路等の線形の改良や、進入路の幅員を 3.6m から約 3m にすることにより、事業規模を縮小し、造成に伴う濁水の発生量を低減します。
- b 「第 6 章 6.1.5 赤土等による水の濁り」によると、赤土等流出防止対策として、土工事中は各施工区域毎に法面等へのシート被覆、碎石舗装等を行います。さらには、濁水防止効果をより高める目的から、早期緑化(ヘリコプター着陸帯における全面芝張、無障害物帯における草本類の植栽等)を行います。
- c 造成に伴い発生する濁水は、凝集沈殿方式の濁水処理プラントにより、環境基準の A 類型を満たす SS 濃度(25mg/L 程度)に処理し、放流することから、流下経路に生育する貴重な植物種や、溪流河岸植生の生育環境への影響を低減します。

8.4 動物

第7章に示した動物に係る「事後調査の結果と環境影響評価の結果との比較検討の結果」により、N-4.1での工事の実施に伴う環境影響は、環境影響評価図書に記載された環境保全措置を講じたことによって、概ね低減されているものと考え

る。したがって、動物については、新たな環境保全のための措置を講じる必要はないと考える。

なお、環境影響評価図書に記載した環境保全措置は、以下に示すとおりである。

ア 土地の改変による影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 事業実施区域内における貴重な動物のうち、地表徘徊性の種、ならびに食草から離れない昆虫類等移動能力の低い種、計19種については、移動等の個体の生存を確保するための保全措置を行います。これらの貴重な動物種は表7.2.2(1)に示しました。これらの種が生息するのに適した環境および行動様式については表7.2.2(2)にまとめ、移動を図る場合に移動先として適すると考えられる場所は図7.2.2(1)～(3)に示しました。

地表徘徊性のうち小型で歩行能力の低い種や食草から離れない昆虫類の計12種については、「6章6.2.2動物」における種別の生息環境の一覧(表6.2.2.2(7)現地調査結果に基づく動物の生息環境)にもとづき、生息に適すると考えられる植生の場所へ移動を図ります。その際、遺伝的攪乱を避けるため直近の場所を選定します。移動は伐採前および造成工事前に行うものとします。

このうち、リュウキュウヤマガメなど歩行能力が比較的高い大型の計7種については、伐採作業等の工事作業を改変区域の中心から開始して、その後徐々に周辺に広げていく手法を採用することで非改変地への自力移動を促します。また、地中の穴で越冬する種については、越冬前に現況の把握を行い、適切な対応を行うものとします。

- b 工事中において工事区域への動物の再進入が考えられることから、工事区域の周囲に土砂流出防止柵を兼ねた小動物進入防止柵の設置を行い、影響を低減する保全措置を実施します(小動物進入防止柵の設置イメージは図7.2.2(4)参照)。小動物進入防止柵は、伐採樹木を活用します。

また、保全を要する貴重な動物については形態や生態、活動時期を記した貴重種手帳の作成を行い、工事作業員に配布して注意を促します。

- c 伐採樹木の利活用については、小動物進入防止柵への利用に加えて、代償措置としてノグテゲラの人工営巣木、また人工採餌木(リュウキュウヤマガメなどの動物シェルターを兼ねる)としての活用を行います。伐採樹木の製材、チップ加工は訓練場内で行い、訓練場外部への廃棄物としての搬出が生じないようにします。

- d 工事区域の周辺林内に生息する動物への影響を極力回避する目的から、周辺林内への作業員等の無用な立ち入りを制限します。

イ 造成工事に伴い発生する濁水の影響

- a ヘリコプター着陸帯の規模を直径 75m から 45m に規模の縮小を図ることで、造成にかかわる工事期間が短縮されます。短期間で工事を終了することで、水系に依存する動物への影響の低減が図れるものと考えられます。
- b 「6.1.5 赤土等による水の濁り」によると、赤土等流出防止対策として、土工事中は各施工区域毎に法面等へのシート被覆、碎石舗装等の対策を行い、造成後においては造成面や法面からの濁水防止効果をより高める目的から、早期緑化(芝張、植栽)等の低減措置を行います。

ウ 建設機械の稼働に伴い発生する騒音の影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 騒音による影響を回避するため、ノグチゲラ等の多くの鳥類を中心とした貴重な動物の繁殖期間である 3~6 月頃において、土工事を避けるよう、工事工程を調整します。
- b 機械稼働時は空ぶかしや高速運転を避け、待機時には細かなエンジン停止を実施します。

エ 工事用車両の走行に伴うロードキル(路上での轢死)の影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 訓練場内の工事用車両の通行速度を制限する低減措置を実施します。また、特に保全を要すべき貴重な動物種については、形態等を記した貴重種手帳を工事作業員に配布して注意を促します。

(2) 存在・供用

エ 訓練用車両のロードキル(路上での轢死)の影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 訓練用車両の走行する進入路等については、「6.2.2 動物」に示した動物の道路横断を多く生じやすいと考えられる箇所に注意看板を設置します。また、訓練兵に対する環境教育の実施を要請することで、訓練場内を利用する兵員の貴重動物の保護の注意喚起を促します。

オ 移入動物(ノネコ、マングース等)の影響

(7) 環境保全措置の内容

- a 一般道路とヘリコプター着陸帯への道路の接続箇所に、肉食の移入動物であるノネコやマングースの侵入を防止するフェンスを設置します。また、事業実施区域は米軍基地内であることから、民間人の立入は禁止されており問題は少ないものと考えられますが、貴重な動植物等の盗木や盗掘防止を兼ねてのフェンス設置とします。設置場所としては、事業実施区域 N-1.2 と N-1.3 は訓練場内の既存の林道と民間道の接続箇所の 2ヶ所、N-4.1 と N-4.2 は訓練場と県道との境界に 1ヶ所、G.1、H.2 は進入路等の入口に各 1ヶ所を計画しています(設置箇所は図 7.2.2(9)~図 7.2.2(13)を参照)。

フェンスの構造は、図 7.2.2(8)に示したように、沖縄県が実施したフェンスを参考とします。また、フェンスの脇からの回り込みを防ぐような構造的配慮も行います。なお、ヘリコプター着陸帯の進入路等については、緑陰のある既存の林道の一部改修であることから、開けた場所を好むマングースやノネコの侵入抑制が期待できる構造と考えられます。

なお、ノネコやマングースなどの外来種は、この地域に固有なヤンバルクイナの減少要因とも考えられています。ヤンバルクイナは年々減少しているとされ、絶滅の危険性が高いと考えられています。そのため、着工前(フェンスの設置前)には、再度、専門家等の指導・助言を受け、他の侵入防止策や生態系を保全する上で効果的な手法の有無について、検討していくこととします。